

# 南出遺跡

—玉名市中における店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—



2025

玉名市教育委員会

## 序

玉名市は、熊本県北西部の菊池川下流域に位置しており、古代から長い歴史を持ち装飾古墳などの豊富な文化財が存在する地域です。現在は九州新幹線を軸に県北部の経済・観光ならびに教育・文化の拠点として更なる発展を遂げようとしています。

このような中で、玉名市教育委員会では、様々な開発事業と発掘調査の円滑な調整を図るため、埋蔵文化財保護行政の充実に努めているところです。また、その成果の公開および活用を通じて広く教育・文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は、玉名市中に所在する南出遺跡で計画された店舗建設に伴う発掘調査成果をまとめたものです。弥生時代の甕棺などが出土していますが、本書が埋蔵文化財に対する理解の一助となり、また学術研究にも広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたりましては、多くの方々にご多大なご理解とご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

令和7年3月7日

玉名市教育委員会

教育長 福島和義

## 例言

1. 本書は、玉名市教育委員会が令和5年度に実施した熊本県玉名市中に所在する南出遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、玉名市教育委員会が実施し、文化課の釧父雅史が担当した。
3. 現地調査における遺構実測、写真撮影等は釧父が行い、三次元計測用の写真撮影は同文化課宇田員将の協力を得た。
4. 挿図に使用している座標は、玉名市役所税務課の地籍図等から転記し、座標値は世界測地系第2座標系に基づいている。
5. 出土遺物の実測・撮影ほかデジタルトレース・作図等は、釧父が行った。
6. 整理作業は、玉名市文化財整理室で行った。
7. 出土遺物は、玉名市文化財収蔵庫で保管している。
8. 本書の執筆・編集は釧父が行った。

# 本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の計画と実施	1
3. 調査の体制	2
II. 遺跡周辺の環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III. 調査の記録	
1. 調査区の設定	4
2. 基本層序と遺構配置	4
3. 遺構と遺物	5
1号喪棺墓 (S01)	5
2号喪棺墓 (S02)	7
3号喪棺墓 (S09)	7
4号喪棺墓 (S11)	8
5号喪棺墓 (S12)	8
1号土壙墓 (S05)	10
2号土壙墓 (S06)	10
3号土壙墓 (S07)	11
4号土壙墓 (S08)	11
5号土壙墓 (S13)	12
1号土坑 (S04)	12
2号土坑 (S10)	13
3号土坑 (S17)	13
4号土坑 (S18)	13
溝状遺構 (S03)	14
溝状遺構 (S03) 出土土器	15
区画溝 (S14)	16
1号掘立柱建物跡 (S19)	16
2号掘立柱建物跡 (S20)	16
3号掘立柱建物跡 (S21)	17
4号掘立柱建物跡 (S22)	17
S023 (焼土痕)・S024 (白色粘土埋納ピット)	17
IV. 総括	
1. 南出遺跡の性格	18
2. 南出遺跡における喪棺の分類と変遷	19
3. 市内における喪棺とその比較	20
南出遺跡出土遺物観察表	22
写真図版	23

## Ⅰ. はじめに

### 1. 調査に至る経過

本調査は、熊本県玉名市中 1790-1 において、店舗建設に伴う造成工事が計画されたことに起因する。事業計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「南出遺跡」の範囲内に所在していたため、令和 5 年 8 月 22 日に計画地内の一段高い西側を中心に確認調査を実施した。その結果、計画地内の東側については、以前から給油所があったため、大幅な削平を受け埋蔵文化財は残存していないことが明確となったが、西側の宅地部分からはトレンチ内において弥生時代中期の甕棺墓数基が確認された。遺構が残存していると想定された範囲は、造成によって掘削が予定されており、協議の結果、計画変更が不可能であったため、地下遺構が損壊される範囲（約 600m）を対象として本発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うこととなった。

### 2. 調査の計画と実施

事業主体者は、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づき、令和 5 年 8 月 30 日付けで埋蔵文化財発掘の届出を行い、熊本県教育委員会から工事施工に先立ち発掘調査を実施すべき旨の指導が通知された（令和 5 年 9 月 11 日付け教文第 267-2 号）。その後、事業主体者からの委託を受け、令和 5 年 9 月 15 日に埋蔵文化財発掘調査にかかる委託契約と協定書を締結し、玉名市教育委員会は、令和 5 年度事業として本発掘調査を実施することとなった。

調査は、表土から調査対象となる遺構検出までの掘削を重機掘削とし、それ以下に一部残る包含層掘削、遺構検出および掘削作業は人力によって行った。遺構分布状況および土層堆積状況、個別遺構記録については、実測図面および写真による記録を行った。

重機による表土掘削は、令和 5 年 9 月 5 日から開始し、その後、遺構検出を実施、10 月 1 日からは発掘作業員 5 名による遺構掘削作業に入った。同日から S03（溝状遺構）の掘削を開始した。その後、順次甕棺墓の再検出と掘削を行った。当初、甕棺墓が 10 基ほどあるものと想定していたが、実際のところは 5 基であり、その他は土坑などで特に遺物も出土せず、何よりも東側は遺構の分布が途切れたため、予定よりも早く 10 月末にほぼ全ての遺構を完掘した。11 月初頭までには完掘状況の写真撮影と三次元計測、測量、道具撤収など現地での作業を終了し、令和 6 年 1 月 4 日から整理作業員 2 名を雇用して甕棺の接合復元等の作業を開始して 3 月中まで実施した。また、令和 6 年度になり改めて事業主体者との間に委託契約等を締結して報告書作成を実施、年度内に印刷製本を完了し刊行に至った。



調査地遠景（東から）



表土剥ぎ完了後（西から）

### 3. 調査の体制

発掘及び整理作業（令和5年度）・報告書作成（令和6年度）

調査主体 玉名市教育委員会

調査責任 教育長 福島和義

調査総括 教育部長 藤森竜也

文化課長 瀬崎陽一郎

庶務担当 文化財係長 末永 崇

発掘調査員 主査 樋父雅史（整理作業・報告書作成含む）

発掘作業員 小塩勝美 嶋村倫子 西 敏弘 松本典子 吉川ゆかり

整理作業員 北嶋百合子 藤井めいこ

調査協力 新規建設株式会社 株式会社廣田組



南出遺跡の位置



調査状況1（東から）



調査状況2（南東から）

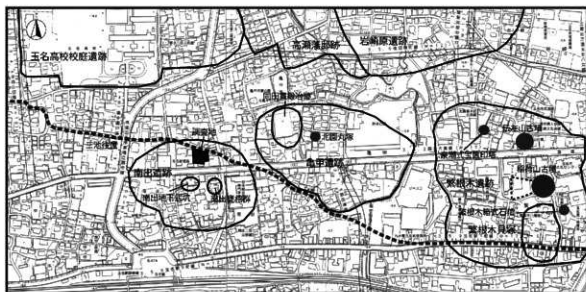
## II. 遺跡周辺の環境

### 1. 地理的環境

南出遺跡は、玉名市中に所在する弥生時代中期を中心とした遺跡で、筒ヶ岳を主峰とする小岱山地から南へ延びた「玉名台地」上にある。当地地は、中生代の花崗岩隆起運動およびA SO4火砕流によって形成された後、約1万8000年前の海退現象によって開折され、約6000年前の海進に伴う土砂堆積を経て今日の形となったものである。現在、東に菊池川と繁根本川、西に境川が流れている。調査地は、これらの河川に挟まれた台地上（標高約16m）の地点に位置しており、南側は県道に面し、北側は旧三池往還に接するなど以前から玉名の中心街として繁栄してきた所である。当敷地内は、かつて給油所及び宅地・畑として利用されていたが、その後、解体され更地となっていた。

### 2. 歴史的環境

この周辺において、南側は段丘となっており、海水が入り込んでいたとみられ、縄文時代には繁根本貝塚が形成されている。その後、主に弥生時代を通して継続的に集落が営まれており、弥生時代中期の南出遺跡、後期の住居跡などが検出されている亀甲遺跡・岩崎原遺跡・繁根本遺跡群が所在する。古墳時代になると、繁根本一帯には稲荷山古墳・伝左山古墳・繁根本箱式石棺などがつくられる。中でも稲荷山古墳は削平を受けているものの、本来は県下最大規模の前方後円墳であり、玉名地域を代表する首長墓である。古代には、立願寺に玉名郡衙が造営され、当遺跡の南側（JR玉名駅付近）には湊が想定されており、それから北へ延びる官道はこの南出遺跡を貫通している。中世には、在地勢力の大野氏支配のもと、玉名台地上にも城館（中村館）が建てられ、春出の集落形成も進んだ。その後、近世になると高瀬から荒尾方面を通る三池往還が整備され、明治24年になると鉄道が開通する。高瀬駅（現玉名駅）が設置されると、交通の要所となり、旧国道（現：県道347号）が横断した後は、両側に店舗建設が進み玉名の中心街として発展していった。周辺には高等学校・大学もあり学園都市ともなっている。



第1図 南出遺跡調査地位置図 (市都市計画図 5 = 1/2500 を引用して作成)

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 調査区の設定

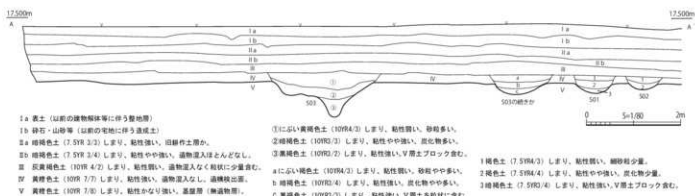
確認調査の結果から1789-3番地よりも西側は以前の給油所に伴う攪乱などで遺構が残存していなかったため、1790-1番地を中心に範囲を設定した。なお、調査区は周囲との高低差が2m以上あり、石垣やL型擁壁で囲まれていたため、安全面も考慮してより内側に調査区を設定している。調査区の北側は以前の建物跡でコンクリート基礎による攪乱が著しいことから排土置場とした。



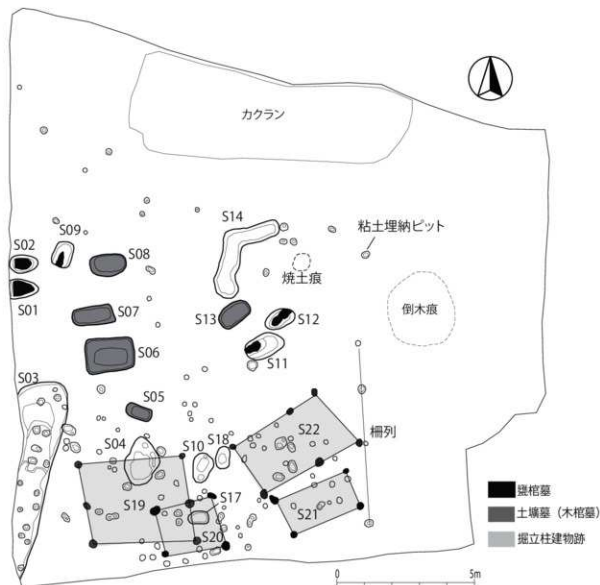
第2図 発掘調査区位置図(1/100)

#### 2. 基本層序と遺構配置

下図は、調査区西壁の土層である。この延長先も同様であるが北側壁は攪乱を大幅に受けていた。Ⅲ層以下の遺構検出面までは包含層に相当すると考えられるが、ほとんど遺物を含まず、土器片も粒状になっていることから長い期間耕作・整地が繰り返されてきたものと想定される。



第3図 調査区西壁土層図(南-北)



第4図 南出遺跡の遺構配置図

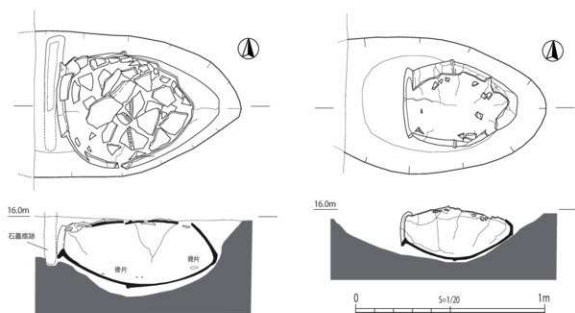
### 3. 遺構と遺物

#### 1号甕棺墓【S01：弥生時代中期後半後葉：大型単棺】

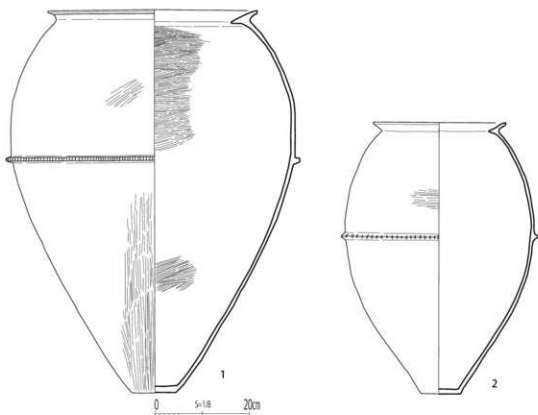
調査区西端において、確認調査時の1トレンチで検出していた遺構である。上面は部分的に削平を受けている。大型の単棺であり、西端調査区外の工事掘削立会においても、甕棺の続きは検出されなかった。S02(2号棺)と接しており、同じ方向で並んでいるように見受けられる。西側には甕の口縁部に沿って明瞭な蓋状の掘り込みが認められ、本来は石蓋であった可能性が高い。石材はトレンチ掘削時に重機バケットで引き抜かれたと考えられ、その痕跡には埋土もなく、はっきりと残っていた。なお、表土掘削時に安山岩板石の破片を採集している。

このような石蓋の単棺は市内において伊倉の中北遺跡にあり、過去の調査でも伊倉宮の後遺跡や立願寺の松尾原遺跡などにおいても類例がある。当墓塚は、長軸1.2m、幅7.8m、検出面からの深さは最深部で0.4mである。甕棺の埋納傾斜は水平に近い。上面は削平を受けており欠損していた。口縁部を西側に向け、甕内部の底面付近から人骨片が検出されたが風化が著しく粉末に近い状態であった(写真13参照)。よって土壌ごと取り上げて保存している。





第5図 1号墓棺(S01)・2号墓棺(S02)実測図



第6図 1号墓棺(S01)・2号墓棺(S02)実測図

1号棺は、調査区内の墓棺では最も大きいですが、大型棺の中ではやや小ぶりである。口縁部断面はT字型に近く内傾する。胴部中位に明瞭な刻目をもつ突帯が1条めぐり、底部は平底である。特に内面の調整痕であるハケ目が顕著に残り、焼成もしっかりしている。全体的に細長く下半部は尖り気味になるタイプで、いわゆる南筑後系とされる形状に近い。ハケ目を残す点も似ている。市内では東南大門遺跡のK-29 甕・K-31 下甕に酷似するが、東南大門遺跡の甕は焼成があまく色調が異なる。これは口縁部内傾が強化していることから弥生時代中期後半葉とみられる。

## 2号甕棺墓【S02：弥生時代中期後半葉：中型単棺】

調査区西端において、1号甕棺墓と同様、確認調査トレンチで検出していた遺構である。西側は調査区外となるが、規模は長軸1.06 m、短軸0.72 m、深さは0.26 mを測り、卵型に近い楕円形を呈する。1号墓と併行するように東西方向に埋納された中型の単棺であった。蓋はなく、1号墓のような蓋の掘り込みも明確に認められなかったため、甕の口径程度の木板が蓋として利用された可能性がある。甕は、西に口縁部を向けて、ほぼ水平に据えられていた。上面は削平を受けており、欠損している状況である。甕棺内は流入した土で満たされており、土器小片を検出したのみである。

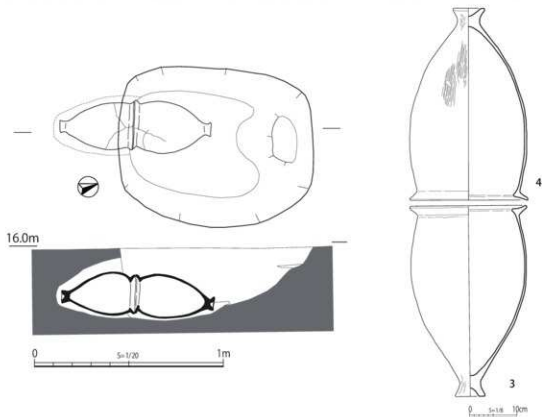
この2号棺は、1号棺ほど大きくはないが、口縁部の断面形状や内傾するところは類似する。全体的には卵形で、胴部中位に明瞭ではない刻目突帯が1条めぐり、底部は平底である。東南大門遺跡のK-8甕・K-9下甕・K-32甕に類似するものの、南出遺跡の場合は口縁部内側の内傾化がより顕著である。時期も1号棺とほぼ同じで弥生時代中期後半葉とみられる。

## 3号甕棺墓【S09：弥生時代中期後半：小型棺合口】

1・2号棺と接するように配置され、甕棺の小グループとしては同じ可能性もあるが、埋葬方向が南北に近く、1・2号棺とは異なる。墓域は、長軸1.03 m、短軸0.85 mを測り長方形に近い。

いずれも黒髪系の小型棺を合口にしており、下甕は南側にさらに掘り込まれ埋納されている。角度も水平というよりは上甕の方がより下がつて埋葬されているように見受けられる。上下棺とも、ほぼ同形の大きさであり、口縁部分もきれいに密着していたが、粘土貼りの痕跡は確認できなかった。いずれも完形のまま検出されたものの、内部には若干の埋土が流入しており、人骨も残存していなかった。市内では玉名平野遺跡群において、同類の小型棺に小児の人骨片が残存していた例がある。また、黒髪系の小型棺は塚原遺跡においても5基出土例がある。

甕は、いずれも鋤先状の口縁部がやや内傾し、内側がわずかに突起する。胴部の最大径は中位に位置し、下半部は細くなる。器面にハケ目が残り、薄く仕上げられ底部は上げ底である。



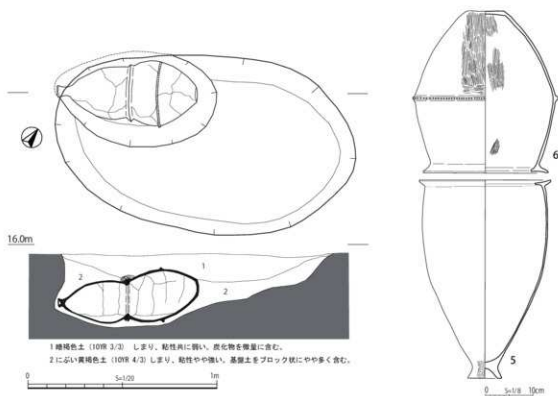
第7図 3号甕棺墓 (S09)・甕棺実測図

#### 4号墓棺墓【S11：弥生時代中期後半：小型棺合口】

1・2・3号棺とは東側へ約7m離れており、5号墓棺墓と接する。墓壇は長軸1.62m、短軸0.93mの楕円形で、北西端をさらに掘り込み、上甕を若干高くして埋葬されていた。当初は墓壇の重複として考えたが、土層断面の観察結果から、明確な切り合いは認められなかったため同一遺構とした。小型棺の合口でいずれも黒髪系の甕を合口にしており、接合部には粘土貼りの痕跡があった。粘土は白色を呈し、一部に残存している程度であった。いずれも完形のまま検出されたものの、内部には若干の土が流入しており、人骨は残存していなかった。

4号棺下甕は、3号棺の上下甕とすべてが類似しており、同じ地域で製作されたことがわかる。器面はかなり薄く仕上げられている。上甕の口径は広く、口縁部は鋤先状に近いが内傾しない。

胴部が最も張り出す中位に刻目突帯があり、底部は幅の広い平底である。特に下半部においてハケ目調整痕が明瞭に残る。

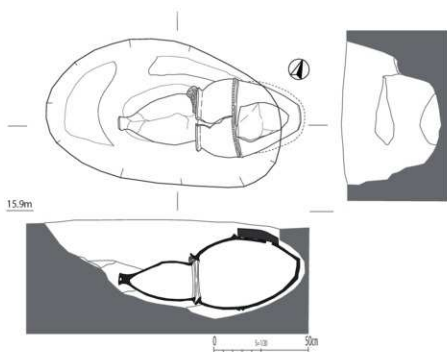


第8図 4号墓棺墓 (S11)・甕棺実測図

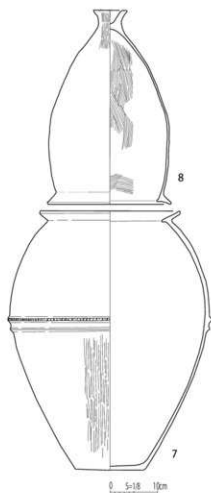
#### 5号墓棺墓【S12：弥生時代中期後半：小型+中型棺合口】

配置から4号棺と同じグループと考えられる。墓壇は長軸1.25m、短軸0.75mの楕円形で、検出面からの深さは、最深部で0.48mである。東端をわずかに掘り込み下甕を設置している。黒髪系の小型棺を合口として、ほぼ水平に埋葬しているが、下甕の方がやや西側へ下がり気味である。甕の接合部には粘土貼りの痕跡があった。粘土は白色を呈し、砂粒をやや含む。付近で検出された粘土埋納ピット内の粘土と同じものと考えられる。

甕はいずれもほぼ完形のまま検出されたが、下甕口縁部付近に大きなひび割れが生じていた。また、下甕の下半部には安山岩板石が置かれており、当初は標石の意味合いがあるものと考えていたが、取り上げてみると甕自体に刺離がみられ小穴が開いていることが判明した。その小穴は意図的に開けられたものではなく、甕の焼成段階から弾けて刺離し、穴が開いてしまっていることが観察できる。つまり、甕棺として採用する際に甕自体に穴が開いているため、土砂が流入しないように板石を密着させていたものと判断される。実際には甕内部には土が流入しており、人骨等も残存しておらず、遺物も検出できなかった。



第9図 5号墓棺墓 (S12) 実測図



第10図 5号墓棺実測図

5号棺は、下襖が中型襖で、上襖が黒髪系の小型襖である。下襖は鋤先状口縁でかなり内傾しながら、内側突起も明瞭である。口径が広く、底部も広いタイプで同様の南筑後系においては珍しい。胸部中位に二条の突帯文がめぐり、上位の突帯には刻み目がある。外面は縦方向のハケ目が明瞭に残り、焼成もしっかりしている。

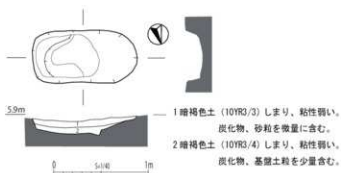
上襖は在地系の襖で、3号棺 (S09) と4号棺 (S11) の小型襖と同類である。外面には底部付近にハケ目が残るが他はナデで仕上げられている。内面はほぼ全体的に細かいハケ目が残る。器面は薄く、底部は上げ底である。



写真1 5号墓棺墓・S12検出状況(南から)

### 1号土壇墓【S05：弥生時代中期】

土壇墓とした根拠であるが、喪棺墓が存在する墓域内で検出される遺構であることと、平面プランが不定形、断面形状も不定形である土坑と区別した点である。もちろん人骨が確認できない以上、墓とする断定には至らないが、墓域内で平断面の形状が定型化、規格性があり、切り合いがなく、一定の間隔をもって配列、もしくは配置されたものは土壇墓や木棺墓の可能性があると考えられる。今回、いずれも木棺の痕跡が明確なものはなかったため、土壇墓としている。1号は配置から4つの土壇墓（S05・S06・S07・S08）と同じグループと考えられる。墓壇は長軸1.12m、短軸0.7mの隅丸長方形で、全体的に小形である。断面形は、南西側に向け傾斜しているため、北東側が頭位であった可能性もある。遺物は弥生土器の器台片ほか小片が出土したのみである。



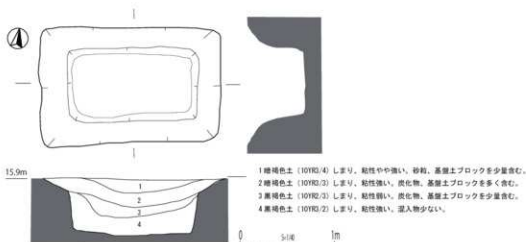
第11図 1号土壇墓（S05）実測図



写真2 4号土壇墓・S05完掘状況（南から）

### 2号土壇墓【S06：弥生時代中期】

配置から1・3・4号と同じグループと考えられる。墓壇は長軸2.32m、短軸1.26mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.67mであった。当調査区内の土壇墓としては最大である。最も形状に規格性があり幅も広い。断面でみると二段構造まではいかないものの、端から緩やかに内部かへ向けて落ち込み、下半部はほぼ垂直に立ち上がる。棺の安置を意識したような掘り込みであるが、底面に板をはめ込むなどは認められなかった。しかし、木棺墓であった可能性も否定できない。底面を精査したが遺物は検出できなかった。埋土は1～4層に区分され、上層の1・2層から弥生土器（甕）の口縁部片や突帯をもつ胴部破片が出土したのみであった。胴部片には赤色顔料が認められるものが含まれていたが、接合はできなかった。

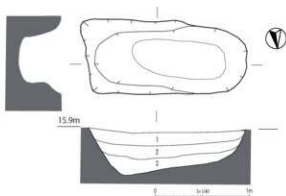


第12図 2号土壇墓（S06）実測図

### 3号土墳墓【S07：弥生時代中期】

配置から1・2・4号と同じグループと考えられる。墓壇は長軸1.68m、短軸0.78mの隅丸長方形で、他の土墳墓と比べてやや細長く、幅が狭い。深さは検出面から最深部まで0.42mであった。

二段構造まではいかないものの、特に東側は緩やかに内部かへ向けて落ち込んだ後に、下半部は垂直に近くなる。1号と同様に西側の底面が高くなり、木棺の痕跡を示す溝などは認められなかった。底面からの出土遺物はなく、埋土は3層に区分され、上層から弥生土器の小片が出土したのみで、縄文後期の御領式土器片も混在していた。周辺からの流れ込みとみられる。



- 1層褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性弱い、炭化物、白色砂粒を微量に含む。
- 2層褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性弱い、炭化物を微量に含む。
- 3層褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性やや強い、一部基壇土をブロック状に含む。

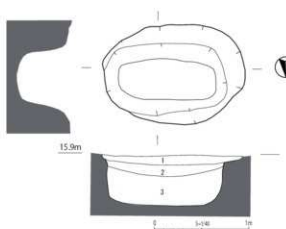
第13図 3号土墳墓 (S07) 実測図



写真3 3号土墳墓・S07 完壁状況 (北から)

### 4号土墳墓【S08：弥生時代中期】

配置から1～3号と同じグループと考えられる。墓壇は長軸1.5m、短軸1.02mの楕円形に近い形で、当調査区内の5号土墳墓 (S13) と似ている。側面は約10cm下までは緩やかに落ち込み、それから下位はほぼ垂直に立ち上がる。深さは検出面から最深部で0.52mであった。底面の形状は長方形により近くなる。底面から遺物の検出はなく、埋土は3層に区分され、1・2層の上層から弥生土器が出土した。中期の小型甕の口縁部ほか胴部の破片が10数点出土しているが接合できないため、埋葬した直後、埋め戻し時点で混入したものとみられる。



- 1層褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性弱い、炭化物を少量含む。
- 2層褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性やや強い、炭化物、基壇土ブロック、土器片を少量含む。
- 3層褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性やや強い、炭化物を微量含む。

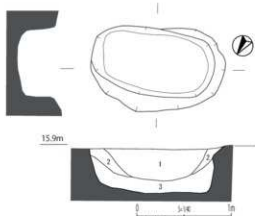
第14図 4号土墳墓 (S08) 実測図



写真4 4号土墳墓・S08 完壁状況 (北から)

### 5号土壇墓【S13：弥生時代中期】

配置から1～3号と同じグループと考えられる。墓壇は長軸1.42 m、短軸0.9 mの楕円形に近い形で、当調査区内の5号土壇墓（S13）と似ている。側面は約10cm下までは緩やかに落ち込み、それから下位はほぼ垂直に立ち上がる。深さは検出面から最深部で0.48 mを測り、西側がやや深くなる。底面の形状は長方形より近くなる。底面から遺物の検出はなく、埋土は3層に区別され、2層から弥生土器（黒髪系）甕の口縁部、器台片が出土したのみであった。



1 ぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり、粘性弱い、炭化物、基礎土を粒状に少量含む。  
2 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性弱い、基礎土をブロック状にやや多く含む。  
3 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性やや強い、炭化物少量、基礎土ブロックを多く含む。

第15図 5号土壇墓 (S13) 実測図

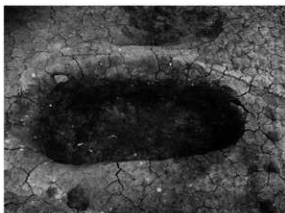
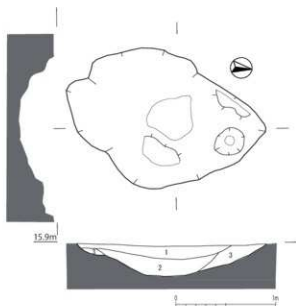


写真5 5号土壇墓・S13 完盤状況 (南から)

### 1号土坑【S04：弥生時代中期】

S05の南側に位置する。配列は1～4号土壇墓と並びそうであるが、平面も断面も規格式がない不整形を呈していることから土坑とした。規模は長軸2.02 m、短軸が1.5 m、深さは検出面から最深部で0.3 mである。墓壇付近に位置することから祭祀に関連する土坑の可能性もあるが、出土遺物は弥生時代中期の黒髪系甕の口縁部片が上層で検出したのみで、他は小片である。祭祀土坑や廃棄土坑にしては遺物が少なく、用途は不明である。



1 緑褐色土 (7.5YR3/3) しまり、粘性弱い、砂粒を微量に含む。  
2 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり、粘性弱い、炭化物を少量含む。  
3 褐色土 (7.5YR4/3) しまり、粘性やや強い、基礎土を粒状に含む、土器小片混入。

第16図 1号土坑 (S04) 実測図

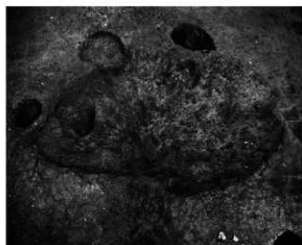


写真6 1号土坑・S04 完盤状況 (西から)

## 2号土坑【S10：弥生時代中期】

S18の西側に接するように位置する。平面も断面も規格性がないことから土坑としたが、当初は検出面から多量の弥生土器甕が集中していたため、喪棺墓として調査していた。しかし、土器集中は上層のみで、下部に遺物はなかった。よって、喪棺が抜き取られて廃棄された可能性もあるが、甕も何個体分もあり廃棄土坑といった性格が強いように考えられる。規模は長軸1.2 m、短軸が0.8 m、深さは最深部で0.2 mである。遺物は弥生時代中期の甕が多く、ほとんど接合不可であった。



第17図 2号土坑 (S10)・出土遺物実測図

9は甕の口縁部で、端部平坦面に赤色顔料が認められる。10も甕の口縁部で、逆三角形の断面を呈し、9と同じく平坦部に赤色顔料を施している。他は胴部の破片が多かったが、顔料が施された甕があることは付近で埋葬に伴う祭祀が行われた可能性もある。

## 3号土坑【S17：弥生時代中期】

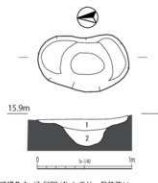
土坑群としては最も南端に位置する。2号掘立柱建物跡 (S20) と想定している柱穴群の内側に並行して位置することから、この建物跡に付随する遺構の可能性もある。平面も断面も規格性がないことから土坑とした。規模は長軸0.85 m、短軸が0.53 m、深さは最深部で0.13 mである。遺物は弥生土器小片と黒曜石片が出土したのみである。

## 4号土坑【S18：弥生時代中期】

遺構は、2号土坑 (S10) の南側に位置し、併行するように接している。平面も断面も規格性がないことから土坑とした。規模は長軸0.98 m、短軸が0.54 m、深さは検出面から最深部で0.3 mである。東西の両端が一段下がって中央部分が楕円形を呈しながら、ピット状に落ち込む。遺物はほとんど出土していない。



第18図 3号土坑 (S17) 実測図

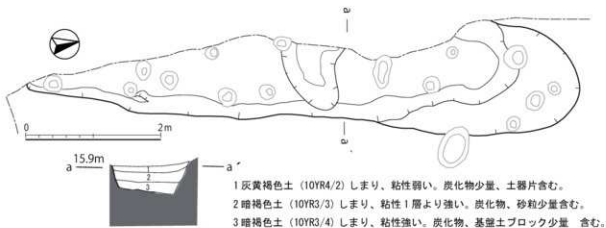


第19図 4号土坑 (S18) 実測図

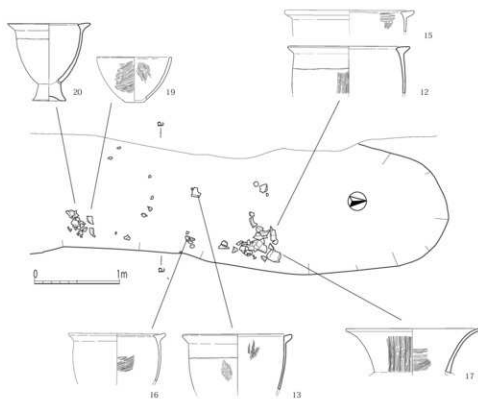


### 溝状遺構【S03：弥生時代中期】

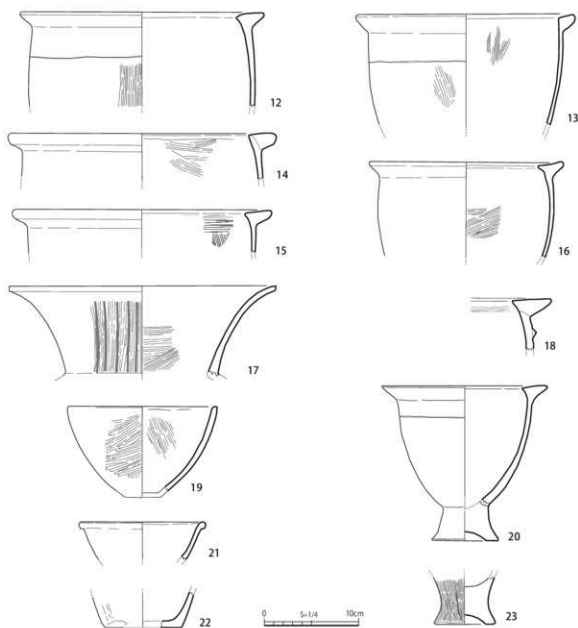
調査区南西端で検出した南北方向に延びる溝状遺構である。東西方向に列状に配置される喪棺墓・土壇墓群の手前が溝が途切れることから、墓域を区切る区画溝であった可能性がある。溝の長さは8.2 mまで確認でき、幅は北側で1.6 m、深さはビット部分を除いて0.5 mと、削平を受けているにしても深いではなく防御的とは考え難い。喪棺墓(S01・S02)の北側断面でも同様の溝状落ち込みが認められることから、これらの喪棺墓群を挟んで溝は途切れていたものとみられ、この途切れた部分が陸橋部であったことも考えられる。実際に、西側隣接地のトレンチ調査では、墓地は検出されず、住居跡のプランが確認されていることから西側が集落域で、この溝から東が墓域空間であったと想定される。遺物は、底部からほとんど出土していないものの、北端(陸橋部側)の上層部から多量の弥生土器が集中して検出され、埋没した頃に廃棄されている状況であった。最終的な埋没時期は、これら上層の土器から弥生時代後期前半であったことが伺える。



第20回 溝状遺構(S03) 実測図



第21回 溝状遺構(S03) 上層の遺物出土状況



第22図 溝状遺構 (S03) 上層出土土器実測図

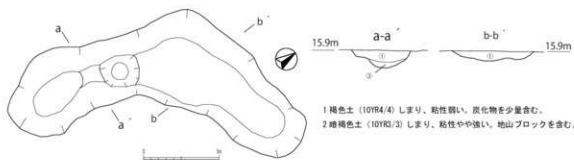
#### 溝状遺構 (S03) 上層出土土器

12～16・18は甕で、全体形がわかるものは少ないが、弥生時代中期初頭から前半頃とみられる口縁部が厚く丸みを帯びるものから、中期後半から後期前半頃の黒髪式系統の口縁部が鋤先状になるものまで含まれる。20は小型の甕で、完形品ではなく図上復元を行っているが、類似するものが市内の北の崎遺跡から出土している。また、甕の中では胴部上位に一条の沈線があるものが3点あった。17は広口壺の口縁部とみられ、縦方向の刷毛目調整後に一定間隔の暗文が施されている。肉眼で赤色顔料は確認できなかったが、須玖Ⅱ式にみられる祭祀的な赤彩土器を意識した土器と考えられる。市内で類似した土器は年の神遺跡にもみられる。19・21は鉢とみられ、21は口縁端部がやや丸みを帯びて膨らむ。

これらの土器群は、溝の上層からある程度まとまって検出されているものの、土器に時期差が認められるため、溝の埋没時期が最終的には弥生時代後期前半頃ということが出来る。

#### 区画溝【S14：弥生時代中期】

裏棺墓（S11・S12）と土壇墓（S13）のグループ北側において検出した溝状の遺構である。「く」字状に折れ曲がり、これより北側に裏棺墓などが認められないことから墓域あるいはグループを区画を示す溝と考えたが、西端で検出した溝（S03）とは規模が異なることや、その他のグループには認められないことで断言はできない。しかし、熊本市の神水遺跡などでは明らかに裏棺墓31基を5つのグループで区画する「く」字状や弧状の溝が配置された例がある。また、同じく熊本市の新南部遺跡でも裏棺墓群のグループ単位を区切るような溝が検出されている。この溝の規模は、長さ3.9m、幅1.3m、深さは最深部で0.24mと浅く遺物も弥生時代中期の裏口縁部、器台片など小片が出土したのみである。



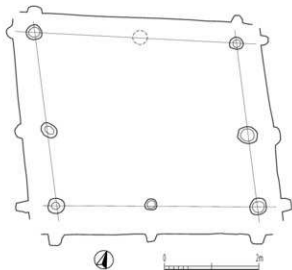
第23図 区画溝（S14）実測図

#### 1号掘立柱建物跡【S19：弥生時代中期】

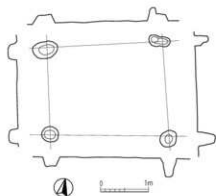
調査区の南側一帯にはピットが集中して検出された。配置を検討した結果、ある程度規格性がある柱穴群を掘立柱建物跡とした。少なくとも4棟の建物跡が確認できたが、何度か建て替えが行われていたとみられる。S19は、2間×2間の建物跡で、長さ4.2m、幅3.6mの正方形に近いがやや歪みがみられる。柱穴の深さは0.15～0.20mで、遺物は柱穴内から弥生土器片が出土している。

#### 2号掘立柱建物跡【S20：弥生時代中期】

調査区の南端で1号掘立柱建物跡と重複するように検出されているため、建替えられているものと考えられる。1間×1間の建物跡で、長さ2.5m、幅2mの正方形に近く、その比率は1号建物跡が約2倍になっているため、2号から1号へ建替えられた可能性がある。柱穴の深さは0.25～0.55mである。出土遺物は北東端と南西端の柱穴内から弥生土器小片のみである。



第24図 1号掘立柱建物跡（S19）実測図



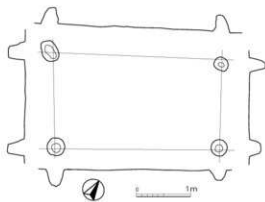
第25図 2号掘立柱建物跡（S20）実測図

### 3号掘立柱建物跡【S21：弥生時代中期】

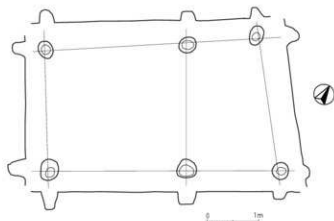
調査区の南端で4号掘立柱建物跡と併行するように検出されているため、4号に付属する同時期の建物跡の可能性も考えられる。1間×1間の建物跡で、長さ3.1m、幅1.7mを測り、長方形に近い。柱穴の深さは0.34～0.53mである。出土遺物は北側列の柱穴内から弥生土器小片のみである。

### 4号掘立柱建物跡【S22：弥生時代中期】

調査区の南側で3号掘立柱建物跡と併行するように検出されているため、3号に付属する同時期の建物跡の可能性も考えられる。1間×2間の建物跡で、長さ4.3m、幅2.4mを測り、長方形に近い。柱穴の深さは0.25～0.48mである。出土遺物は南西端の柱穴内から弥生土器の壺頸部が出土した。



第26図 3号掘立柱建物跡 (S21) 実測図



第27図 4号掘立柱建物跡 (S22) 実測図

### S023 (焼土痕)

調査区の中央付近で検出した焼土痕である。掘り込みは確認できなかったが、約0.6×0.7mの円形範囲で基盤層(遺構検出面)が被熱によって赤く焼けている。

市内の山田松尾平遺跡で確認されている野外炉の可能性も検討したが、高温による硬化まではしておらず、周辺は墓域であり区画溝や倒木痕しかない空白地帯であることから、埋葬儀礼に伴う祭祀的な場所であったことも想定できる。



写真7 S023・焼土痕検出状況(南から)

### S024 白色粘土埋納ビット

調査区の北東側で検出したビットで、数あるビット群の中でも唯一、白色粘土が塊になって検出された。長軸0.31m、単軸0.22m、深さ0.42mを測り、埋土のほとんどが白色粘土であった。

この粘土は、4・5号喪棺(S11・S12)の合口接合部に使用されていた粘土と同じであり、一時的に保管されていた可能性もある。この粘土は、ややシルト質で築地や山田一帯でも比較的容易に採取可能な粘土である。倒木痕や焼土痕などの中間に位置しており、埋葬儀礼に伴う埋納を目的としたビットと想定している。

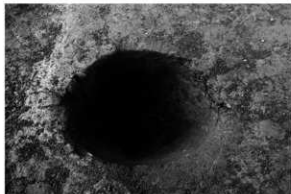


写真8 S024・ビット完備状況(南から)

## IV. 総括

### 1. 南出遺跡の性格

当遺跡は昭和36年にも調査例があり、以前から甕棺が出土していたことは知られていたが、遺物の所在も不明であり、全く情報が不足していた。また、西側隣接地で平成15年度に確認調査を実施しているが弥生時代の住居跡とみられる遺構のほか、溝状遺構等が検出され、黒髪式の甕破片は多く出土したものの、甕棺墓の検出には至らなかった。

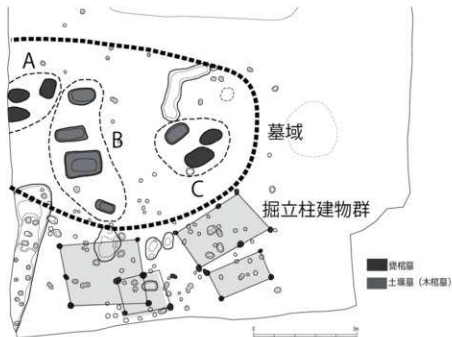
今回の調査では、甕棺墓と土塚墓がセットとなり小グループ化(A～B群)され、少なくとも東西方向に連なっていたことが想定できる(下図参照)。しかし、東側には続かず空白地帯があるため、列埋葬とまでは断言できない。西側隣接地で住居跡が確認され、その間に溝状遺構が存在することを考慮すれば、西側が集落域で、溝で区画された東側が墓域と考えられる。

また、南側には掘立柱建物跡が数基あるが、類似した事例として市内では田崎に所在する北の崎遺跡、県内では阿蘇地域の幅・津留遺跡にある。建物は墓域に接することから、儀礼用の祠堂といった性格をもつ建物であった可能性もある。なお、東側は墓域が途切れ空間があり、倒木痕が検出された。その付近からは焼土痕、白色粘土を埋納したピット、区画溝が確認されたことなどから葬送儀礼が行われた祭祀的な空間であった可能性を想定している。白色粘土は、合口甕棺の接合部に使用されており、同様の粘土塊はこのピットだけから検出された。甕棺墓・土塚墓群からは副葬品は出土しなかったため一般階級の墓地で、大小のまとまりもあることから親族単位のグループとみることができるが、人骨も残存していないため想定域を出ない。

周辺ではさらに南東側に位置する現在の専門学校の敷地内からも甕棺が出土したとされていることから、東西方向に甕棺墓群が連なりながらも、グループ単位で甕棺墓や土塚墓が配置されたと考えられる。いずれにしても、今後の調査事例も含めて検証していく必要がある。



第28図 南出遺跡の甕棺分布域想定図

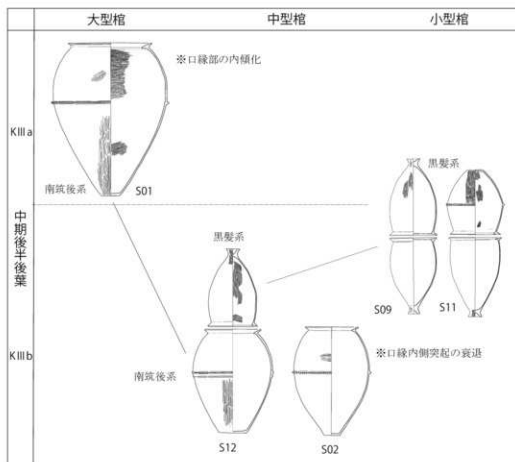


第29図 南出遺跡における遺構区分

市内において甕棺は多く出土しており、弥生時代中期中葉から後半をピークとして、約 250 基の甕棺墓が確認されている（未報告も含む）。これらの周辺には 300 基以上があったと推測できる。しかし、南出遺跡のように土壌墓と混在して配置される例はなかった。こうしてみると、南出遺跡で土壌墓と判断した遺構も、本来は甕棺墓であったともいえないが、塚原遺跡のように後世の住居群に切られていないため、甕を掘りだす理由がない。また、遺構の形状が甕棺墓と違って、壁が垂直状に立ち上がり、深いことなどから、どちらかといえば木棺墓に近いものと考えている。また、溝上層出土の土器が弥生時代後期前半までであることは、甕棺墓が終焉を迎えた後も、集落としては存続していたことを物語っている。

## 2. 南出遺跡における甕棺の分類と変遷

甕棺墓が小グループ化されていた可能性を述べたが、甕棺を個別に時期を検証すると、5 基のうちまず S01 が先行し、その後は、他の甕棺があまり時期を経ずに埋葬されたものと考えられる。大型棺や中型棺は南筑後の影響を強く受けた甕で、小型棺は在地の黒髪系が多い特徴がある。S12 は下甕（主棺）は筑後系で上甕（蓋）は在地系という混在がみられる。この南筑後系の甕棺は、丸みを帯びた甕として認識されており、K III 式の甕棺には口縁部の下に突帯文が付くのが特徴とされるが、南筑後の甕にはそれがなく、福岡や春日の甕棺ではないことが指摘されている。また、南筑後 K II b 式は橋口編年の K III b 式に相当するという（橋口 2005）。こうしてみると、当遺跡において口縁部が内傾化し、その後は口縁内側突起の衰退がしていく変化がわかる。市内では、他に北の埴遺跡、東南大門遺跡で同様の甕棺が出土しており、特に東南大門遺跡出土の K29 は S01 とほぼ同じ寸法と形態である。このような甕棺は、県内で菊陽町（梅ノ木遺跡）や嘉島町（塔ノ木遺跡）などで頻例があり、白川のほかに緑川流域という甕棺分布圏の南限まで流通していたことが窺える。これらの甕棺事例で示されている編年案（船田 2001・橋口 2022）をもとに、分類と時期設定を行った。なお、在地系の甕については橋口達也氏編年の併行期として捉えている。

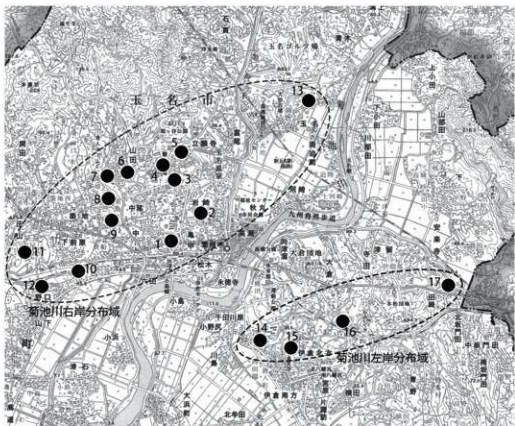


第 30 図 南出遺跡における甕棺の分類と変遷

### 3. 市内における喪棺とその比較

南出遺跡の喪棺と類似した喪棺が他にもあることに触れたが、ここで改めて市内にどれくらい喪棺が分布しているかを示しておく。また、その内容を比較すると市内全体の系列がわかり、各遺跡における喪棺墓の消長も浮かび上がってくる。その中で、南出遺跡の位置づけを行いたい。

まず、市内における喪棺墓の分布を示したのが第31図である。菊池川右岸の低丘陵上に多く分布し、現段階で、信明の年の神遺跡、塚原遺跡一帯と築地の東南大門遺跡にかけての「弥生の大規模集落域」に市内最大の喪棺地帯が存在する。菊池川左岸では分布は少ないものの、伊倉の中北遺跡から宮の後遺跡にかけて喪棺墓群が存在する。これらの中で、年の神遺跡では支石墓が共存しており、喪棺から南海産貝輪が7点も出土するなど階級差が現れてくる。その他、東南大門遺跡の喪棺内から欠損した磨製石剣、棺外から鉄剣が出土している。塚原遺跡では、中期に喪棺墓と共に石蓋土墳墓が伴う例があり、中北遺跡や山田中嶋遺跡では、喪棺墓群に木棺墓、土墳墓の共存が確認されている。これら市内における弥生時代の墳墓を整理してみると、墓制の変化や特徴がわかってくる。おおむね喪棺墓→石蓋土墳墓→箱式石棺墓と変化する、それぞれ土墳墓と木棺墓が共存する。



遺跡名	所在地	調査年・調査者	内容
1 南出遺跡	中	S36年・田添調査、F5年・市調査	黒髪式小型棺1基、その他5基(中型あり)
2 岩崎原遺跡	岩崎原	S46年・田添・田添調査	女子高敷地内に合口棺10基以上あり
3 下立原寺遺跡	下立原寺西ノ段	S29年・田添賢夫・玉名高校調査	定形神柱北側、石家黒棺1基
4 勝堂遺跡	山田勝堂	H13年、玉名市調査	小棺棺2基(東は黒形)
5 松尾遺跡	伊勢寺松尾原	S26年・T嶋崎、S40年・田添調査	合口大小15基(口裏入骨・1基石蓋)
6 山田中嶋遺跡	山田中嶋	S29年・田添、H4~48年玉名市調査	大小16基(南近鉄倉倉付)
7 山田神社前遺跡	山田下馬場	S34年、江崎忠敏、田添調査	旧五郎丸遺跡、大棺
8 古岡遺跡	築地古岡	S34年、築山小新築で発見、田添調査	須玖式合口黒棺7基、合口蓋棺2基
9 東南大門遺跡	築地東南大門	S34年・田添発見、H6年・市調査	大小42基の黒棺群、磨製石剣、鉄剣出土
10 塚原遺跡	伊勢町野口	H27~23年、市調査	大小21基、二列埋葬、石蓋土墳墓共存
11 宮ノ尾遺跡	宮ノ尾大塚	S34年・田添調査	合口小形棺7~8基
12 年の神遺跡	伊勢町野口	S43年・田添調査、H13・28年・市調査	20基以上、ゴホウ貝製陶輪7点出土
13 永安寺東・西古墳	永安寺	H11~15年、復元整備前に市調査	東古墳前に2基、西古墳前に4基の計11基
14 中北遺跡	伊倉北方	S33年・田添調査、H15年・市調査	合口小形棺4基、大形蓋付5基(石蓋あり)
15 宮の後遺跡	伊倉北方	S36年・田添・坂本勉哉調査	須玖・黒髪式30基以上(小形・石蓋倉付)
16 一本松遺跡	田嶋	S37年・田添・田添調査	須玖・黒髪系黒形片
17 北の崎遺跡	田嶋	H16年、市調査	14基(南近鉄倉が年数、須玖・黒髪)

第31図 玉名市内における喪棺出土遺跡の分布





南出遺跡出土遺物種別表

遺物種別	遺物番号	種別	数量	長さ	幅	厚さ	重量	材質	色澤	形状	出土層	備考	
1	1号銅板	S01	1	44.0	9.0	81.5		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ハケ	良	一部に黒肌、黒肌あり、外面はやや緑、内部は赤褐色に染む
2	2号銅板	S02	1	(28.0)	8.5	57.0		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ナ子	普通	約1/2厚手、黒肌あり
3	3号銅板	S03	1	24.5	6.3	40.5		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	普通	同部から部にも黒肌あり
4	3号銅板(下層)	S03	1	25.0	6.6	40.5		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ナ子	普通	部分付近にわずかに黒肌あり
5	4号銅板	S11	1	28.0	7.3	42.0		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	不良	深て黒肌が出たのみ不定
6	4号銅板(上層)	S11	1	26.4	7.8	34.2		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ハケ・ナ子	良	下部に黒肌あり
7	5号銅板	S12	1	29.3	14.2	55.0		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ナ子	良	深くて外面はやや緑の広いハケ・ナ子角、内部は赤褐色に染む
8	5号銅板(上層)	S12	1	28.2	7.1	4.1		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ハケ・ナ子	良	黒肌中央にかみずの黒肌あり
9	6号銅板	S13	1	(29.4)	—	(3.0)		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	良	口縁部に赤色顔料あり
10	6号銅板	S13	1	(44.4)	—	(3.5)		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	良	口縁部に赤色顔料あり
11	7号銅板	S14	1	—	8.0	(3.5)		銅土板	銅板	ハケ	ナ子	良	白色粉、黒粉・角石を少量含む
12	8号銅板	S03	1	12.7	—	(10.0)		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ナ子	普通	取上層6-1、一帯の区域のみ
13	9号銅板	S03	1	22.6	—	(11.7)		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ハケ・ナ子	良	取上層3-1、黒肌あり、外面に又ス石膏、口縁部に赤色顔料あり
14	10号銅板	S03	1	28.0	—	(4.8)		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	良	取上層1-3
15	11号銅板	S03	1	28.4	—	(4.5)		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	良	取上層6-2
16	12号銅板	S03	1	20.4	—	(10.1)		銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ハケ・ナ子	良	取上層2
17	13号銅板	S03	1	28.2	—	(9.5)		銅土板	銅板	ハケ	ハケ・ナ子	良	取上層3、ナ子方面の隅のみ
18	14号銅板	S03	1	—	—	5.5		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	良	取上層3-3
19	15号銅板	S03	1	15.8	—	(8.0)		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	良	取上層1-2
20	16号銅板	S03	1	16.5	7.0	18.5		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	不良	取上層1-1、黒肌あり
21	17号銅板	S03	1	13.0	—	4.0		銅土板	銅板	ナ子	ナ子	良	ベトナム土内
22	18号銅板	S03	1	—	—	8.2	(3.7)	銅土板	銅板	ハケ・ナ子	ナ子	良	ベトナム土内
23	19号銅板	S03	1	6.2	(5.2)			銅土板	銅板	ナ子	ナ子	良	良

写真図版

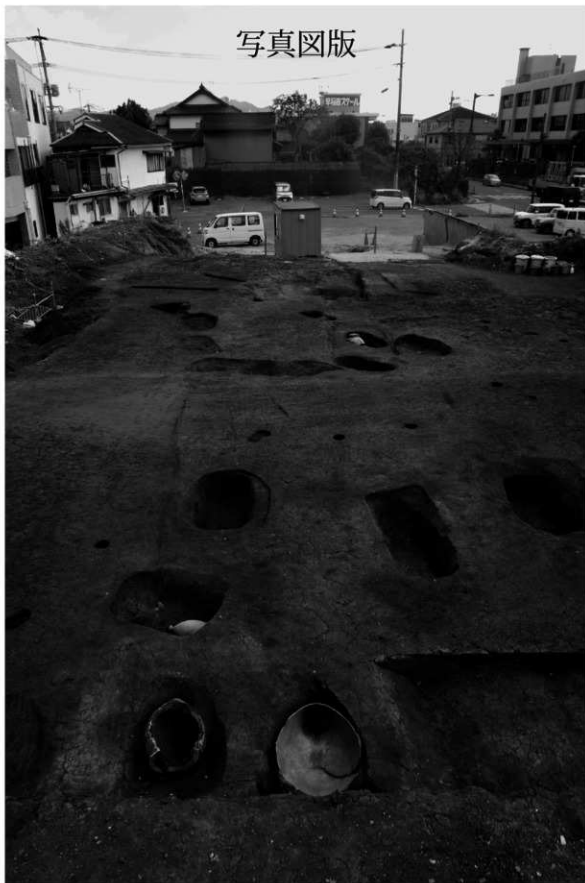


写真9 調査区全景及び墓棺群検出状況（西から）



写真10 調査区全景及び窆柩群検出状況（東から）



写真11 窆柩墓A群出土状況（東から）



写真12 竊棺墓 (S01・S02)  
検出状況 (東から)

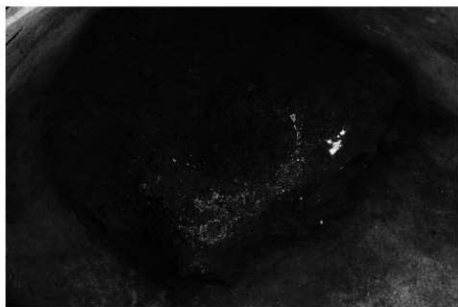


写真13 竊棺墓 (S01)  
人骨片検出状況



写真14 竊棺墓 (S09)  
出土状況 (東から)

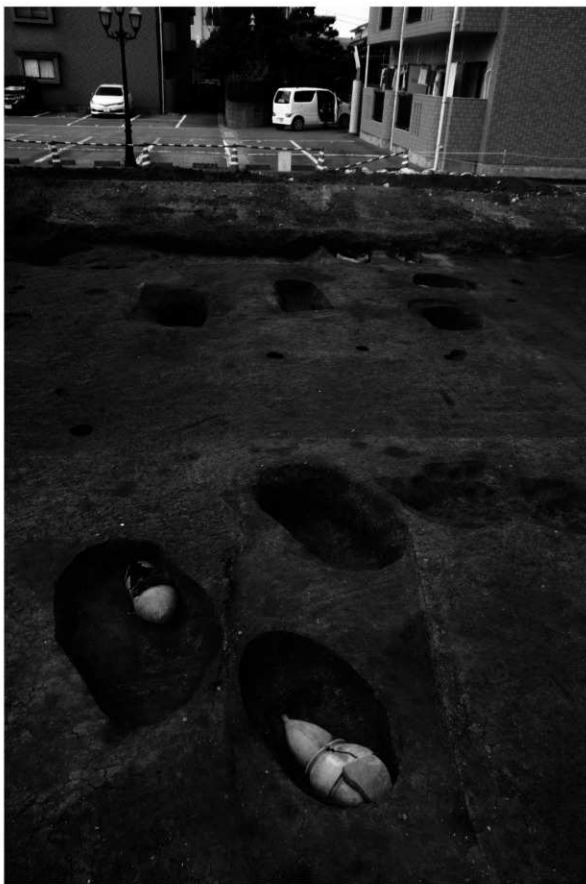


写真 15 妻棺墓・土塚墓群出土状況（東から）



写真 16 妻棺墓 A 群・土壙墓 B 群出土状況 (北東から)



写真 17 妻棺墓・土壙墓 C 群出土状況 (南から)



写真 18 4号甕棺墓 (S11)  
出土状況 (南から)



写真 19 2号土壙墓 (S06)  
完掘状況 (東から)



写真 20 2号土坑 (S10)  
遺物出土状況 (東から)



写真 21 溝状遺構・S03 完備状況 (北から)





写真 22 溝状遺構・503 遺物出土状況（北から）



写真 23 区画溝・514 完掘状況（東から）



写真 24 倒木痕確認状況（南から）



写真 25 柱穴群検出状況（西から）



写真 26 3・4号掘立柱建物跡完掘状況（東から）



写真 27 1号瘞棺 (单棺)



写真 28 2号瘞棺 (单棺)



写真 29 3号瘞棺 (左:下甕・右:上甕)



写真30 4号瘞棺（左：下瘞・右：上瘞）



写真31 5号瘞棺（左：上瘞・右：下瘞）

## 報告書抄録

ふりがな	みなみでいせき							
書名	南出遺跡							
副書名	玉名市中における店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	玉名市文化財調査報告							
シリーズ番号	第54集							
編著者名	廣父雅史							
編集機関	玉名市教育委員会							
所在地	〒865-8501 熊本県玉名市岩崎163							
発行年月日	令和7年3月7日							
ふりがな 南出遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南出遺跡	玉名市中	43206	184	32° 55' 43"	130° 33' 0.8"	2023.9.5～ 2023.11.6	600㎡	店舗建設
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
	集落・墓地	弥生時代中期 弥生時代後期前葉	甕棺墓・土壇墓・土坑 溝状遺構・掘立柱建物跡		弥生土器(甕棺) 弥生土器(甕・壺・鉢)			
特記事項	弥生時代中期の墓地が中心で、甕棺墓と土壇墓がセットとなり小グループ化されて東西方向に配列。空白地帯で確認された例木塚の周辺には埴土版や甕棺の接合に使用された白色粘土埋めヒットがあり、埋葬儀礼が行われた空間であった可能性がある。その南側には掘立柱建物跡群がある。							

玉名市文化財調査報告 第54集

## 南出遺跡

玉名市中における店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

令和7年2月25日 印刷

令和7年3月7日 発行

編集 玉名市教育委員会  
 発行 〒865-8501 熊本県玉名市岩崎163  
 TEL 0968-75-1136 FAX 0968-75-1138  
 印刷 有限会社 玉名民報印刷  
 製本 〒865-0015 熊本県玉名市亀甲261  
 TEL 0968-72-2535 FAX 0968-72-4648